

# 日本史学史における社会史研究(1)

— 二〇世紀前半の日本社会史研究の軌跡 —

夏目琢史

はじめに

「日本社会史とは何か?」という問いかけに対して、多くの人びとは次のように答えるであろう。

「一九八〇年代に流行した歴史学の一つの潮流であり、代表的な研究者としては阿部謹也、二宮宏之、網野善彦などがあげられる。とくにフランスのアナール学派の影響を受けたものであり、教育(子供)やたばこ、コーヒーなど、私たちの日常生活に深くかかわる生活・社会面での出来事を中心とした歴史叙述の方法である。」

しかし、すでにこれまで幾度となく指摘が繰り返されてきたように<sup>(1)</sup>、「日本社会史」は戦前から連綿と続けられてきた一つの分野であって、一九八〇年代以降に登場した性質のものではない。かつて、和歌森太郎の著作集編集にあたった平山和彦と和歌森民男が「近年の「社会史」は、民俗学的伝承に注目する方法論など、その着眼点が和歌森氏の論じていたところと、たいそうよく符合している。したがって、氏の「社会史」論の把握に努めてきたわれわれとしては、近年の「社会史」に「新しい歴史学」としての新鮮さは感じられないのである。」と語ったように<sup>(2)</sup>、また、社会史批判で有名な安良城盛昭が「社会史はそんなに新しい研究潮流なのだろう

か。ヨーロッパのことはいざ知らず、わが日本においては、二〇世紀の初頭から一貫して、社会史的手法が琉球・沖縄史研究の背景となって存在し、現在にいたっている」と述べたように<sup>(3)</sup>、「日本社会史」の歴史はかなり古くまで遡れる問題である。しかし、これまで日本史学史のなかで「社会史」が体系的に把握されることはほとんど無かったように思われ<sup>(4)</sup>、とくに戦前や敗戦直後の日本史学史を「社会史」研究史という視点で総括したものは見あたらない。よって、本稿ではこうした戦前・戦後・現在を通して度々流行してきた「日本社会史」という一つの固有の分野についてあらためて注目し、「日本社会史」とは何だったのかという問題について整理を試みたい(ただし、本稿では紙幅の都合上、一九五〇年代までを対象とする)。

## 1 戦前の日本社会史研究

### (1) 「日本社会史」研究の成立

「日本社会史」の起源は、その定義を広くみれば、それこそ明治期いや幕末の伊達千広の「大勢三転考」(一八四八年)にまで遡ることができ<sup>(5)</sup>。しかし、明治期までの日本史家の多くは、政治・経済史への関心がより強くあり、社会面の歴史についてはそれほど多くの関心を向かせていなかった。「日本社会史」として、社会を中心とした歴史叙述が本格的に行われるようになったのは、二〇世紀以降ということができよう。なかでもいち早く「社会史」に注目した学者は、東洋・西洋史を専攻した者たちであった。たと

えば、平山周『中国秘密社会史』（一九〇〇年）、守屋源次郎『独逸社会史』（一九〇三年）、阿部秀助『資本主義の社会史研究』（一九一四年）などがその早い例といえるであろう。しかし、これらの著作は、ヨーロッパの研究動向をそのまま踏襲するものであつて、「日本社会史」として展開させるような性質の研究ではなかつた。

「日本社会史」の源流は、むしろ二〇世紀初頭の社会学者の著作に求めることができる。社会学者の遠藤隆吉（一八七四—一九四六）は、『社会史論』（一九〇五年）<sup>(6)</sup>と題する書籍を刊行し、「社会学」の延長線上に「社会史」を位置付けた。ここでは、たしかに、社会全般の変遷の歴史Ⅱ「社会史」と解釈されている点や、歴史学というよりも社会学としての要素が色濃く出されている点に課題はあつたが、歴史における「因果」関係に注目したり、歴史叙述において連想力の必要性を説いたりするなど、後に続く「第一次社会史ブーム」（一九二〇—三〇年代）は勿論のこと、（周辺領域学問の成果の積極的な引用としては）阿部謹也や網野善彦などによる、いわゆる社会史ブーム（一九八〇年代）の元祖ともいえる理解がこの著書のなかで展開されている。とくに日本社会の変遷を「血縁時代」「権力時代」「人文時代」とみている点は、政治史とは違う社会を基準とした時代区分であり、後にみるような「日本社会史」の研究の原点をここに見出すことは十分に可能であると思われる。

また、のちに東京文理科大学・中央大学の教授となる社会学者の綿貫哲雄（一八八五—一九七二）も、一九一〇年代に「社会史」について次のような定義を行っている<sup>(7)</sup>。

「即ち当該民族の社会生活の起原より、時代を遂ひて其の変遷の跡を尋ね、其の社会の性情を究め、其の特質を考察する事を

重なる任務として居る歴史である。随つて或る民族の社会的生活の凡ての方面を総アズマフ、アキル体として取り扱ふ綜観的研究なる点に於て通史に類し、又民族の社会生活に現れた経済活動も研究すれば宗教活動教育活動をも取扱ふ点に於て、所謂一般に文化史と称せらるゝ者と類似して居るけれども、従来通史或は文化史と称せられて居る者では、社会生活の起原並に変遷を尋ね、其の社会の性情特質を明にすると云ふ点に於て吾人は少なからず不満である。又理論的にも其の任務の眼目が通史或は文化史と異なる可き者であると云ふ理由の下に、吾人は別に社会史なる者を立てたいのである。」

ここでは、「社会生活」の「総体」を対象とした歴史叙述こそが「社会史」であると規定され、遠藤と同様にかなり広義な理解がなされていることが分かる。こうした綿貫の歴史観の根底には、明治維新时期の「社会変動」とその後の「社会変遷」に対する強い関心があり、「これから」（Ⅱ大正期以降）の日本人の進歩発展のため、「社会生活」の方向性を導き出す方法論の一つとして「日本社会史」が期待されていた。

こうした社会問題への理解をいち早く日本史学史のなかで体系化したのが、三浦周行、本庄栄治郎、喜田貞吉、瀧川政次郎らである。しかし、一九三〇年代以降の日本史学界では、東京帝国大学国史学研究室をその代表として、政治史・思想史を主流とする考えが根強く、「社会」に注目するような歴史叙述はほとんど受け入れられていなくなつた点も事実といえる。しかし、戦前、政治史・思想史とは全く別の方向から日本史研究を積極的に展開した学者も少なくな

かった。以下、みていきたい。

### ○三浦周行の日本社会問題史研究

京都帝国大学の三浦周行（一八七二—一九三一）は、大正期にいち早く積極的に「日本社会史」を講じた著名な歴史家である。三浦は名著『国史上の社会問題』（一九二〇年）のなかで、次のように論じている。

「本書は我が上古以来の社会組織や制度・状態、およびその欠陥から生じた社会問題、それに対する政策などのおもなるものを挙げて、その梗概を説明し、あわせて利害得失を批判しようと試みたものである。即ちこれまでの歴史が、普通政治的に縦断して居る傾きがあるに反して、社会的に横断してみようとしたのであって、また一部の社会史と看做すことができよう。」

三浦の関心はここから明らかなように、大正期に頻発した「社会問題」（米騒動など）におかれていた<sup>(8)</sup>。しかし、この頃の歴史家の問題関心をクロイチエ的な歴史観（＝現代的関心）にのみ求める立場には陥穽もある。大正年間の社会問題の頻発が、日本の歴史家に与えた影響の大きさはあらためて言うまでもないが<sup>(9)</sup>、ここではむしろヨーロッパの歴史学の動向が、彼らの歴史観を大きく左右した点に注意しておきたい。三浦はすでに著書『歴史と人物』（一九一六年）のなかで、英雄豪傑を「社会の生み出した産物」とする理解を示しているが<sup>(10)</sup>、当時の三浦の主要な関心はトマス・カーライル（一七九五—一八八一）らによって展開されていた英雄中心史観への批判であった。ちなみに、永原慶二は「三浦の学問は、中田薫の法制史のように普遍主義的な発想による比較史的視角を欠

いている。欠いているというよりは、そうした方法を三浦はとうとうとしなかった」と評しているが<sup>(11)</sup>、社会と個人を対象とする彼の歴史観の根柢には、つねに比較史的な視点が内在されていた点に注意を払う必要がある。三浦は別のところで、「欧米のような個人主義の社会」と日本の「家族主義」の社会との対比を重視しているが<sup>(12)</sup>、三浦の歴史認識の根柢にも、日本社会と西欧社会の本質的な差異への注目の視点がつねに存在していた（その点では、三浦もまた、中田薫ら明治の学者と同様に、日本と西洋の比較研究の視点が貫かれていたと評価できる）。

また、三浦の「社会問題」への注目の背後には、故人（人物）は社会によって生み出されるものである、という基本的な関心が横たわっていた。それは、換言すれば、個人に対する社会の優位性の主張ということもできる。三浦が「社会問題」に注目する際に、つねにこうした個人を越えて存在する社会そのものに注目した点を看過することはできない。三浦のこうした「学風」は、門下生たちにも大きな影響を与えたとみられる。とくに西田直二郎（一八八六—一九六四）の「文化史」研究の視点には、政治史・経済史とは別の観点からの「普遍」「法則」への着目がみられ、三浦の影響も大きかったと考えられる。三浦はこうした貢献からも日本社会史研究の先達として評価して差し支えないだろう。

### ○喜田貞吉の「社会史研究」

南北朝正閏問題で文部省を追われたことで知られる喜田貞吉（一八七一—一九三九）も、従来の政治史のなかでは十分に取り扱われてこなかった「社会」へと注目し、歴史叙述を展開した代表的



な学者の一人である。彼が大正八（一九一九）年に発行した個人雑誌『民族と歴史』を、大正一一（一九二二）年一月に『社会史研究』と改題したことから明らかなように、彼もまた「日本社会史」という分野の確立をめざしていた。喜田の主要な関心は、被差別民（彼の言葉では「特殊部落民」）の研究におかれ、今日からしては差別的に様々な問題が含まれているものの、そのパイオニアとして高く評価されている<sup>(13)</sup>。喜田は論文「賤民概説」（一九二九年）の緒言で「賤民」の研究はわが民衆史上、風俗史上、最も重要な地位を占むるものの一として、今日の社会問題を観察するうえにとつても、参考となすべきものが少なくない」と述べており、現代的な関心とリンクさせつつ歴史叙述を展開していったことは明らかである。喜田は「自分のいわゆる社会史研究は、普通に世人が常識をもつて口にしてるところの日本の社会上の組織ならびにその諸現象の起源・沿革を明かにせんとするにある。」とし<sup>(14)</sup>、狐憑きなどの民俗学的な事例にも着目、一九八〇年代の社会史ブームにもつながる多彩な論点を提示している（喜田社会史に対する本庄栄治郎氏の批判については後述する）。

また唯物史観にもとづいた日本史研究をめざした社会主義運動家の佐野学（一八九二〜一九五三）も、著書『日本社会史序論』（一九二三年）を刊行し、この時期、積極的に「社会史」を推進していた。佐野は「今までの歴史書は政治史であつたと非難することは不当ではない。治者群は政治を、被治者群は労働をする。政治は重要な社会現象であるが、労働の生活が無かつたならば社会生活は成立しない。真の社会史が編まれる為めには被治者の歴史が明かとならねばならぬ」とし、労働者に焦点をあてた新たな歴史学の必要性を提唱して

いる。佐野は大正期に社会学を熱心に学んでおり<sup>(15)</sup>、「社会を構成する諸要素の階級分化過程に着目するという視点」から「特殊部落民解放論」を展開したことが、すでに黒川伊織によって明らかにされている<sup>(16)</sup>。

このほかにも「社会史」という立場から、この時期に研究を進めた学者は多い。増田抱村も著書『児童社会史』（一九二四年）のなかで、婦人問題と児童の労働問題といった「社会問題」について古今東西の事例をもとに検討し、「本邦江戸時代の児童」も論じている<sup>(17)</sup>。とくに児童の「性道德」・「服装」・「遊戯」・「玩具」・「童謡」といった「社会生活」に関わる場面に注目した叙述からは、柳田國男との共通点が多くみられる<sup>(18)</sup>。これらの研究は、明治以来の正統的な国史研究から見たら、傍流的な位置にあると言わざるをえない。しかし、いわゆる東京帝国大学の正統的な国史研究者のなかにも、「日本社会史」の考えにもとづき、歴史叙述を展開した学者が存在していた。その代表的な学者が平泉澄である。

#### ○平泉澄の日本社会史研究

皇国史観の主唱者<sup>(19)</sup>として知られている平泉澄（一八九五〜一九八四）も、一九二〇年代には「社会関係」へとその関心を向かわせていた。この時期の彼の代表作『中世に於ける社寺と社会との関係』（一九二六年）<sup>(20)</sup>は、まさにその典型的な著作である。この著書は、「第一章 時代の区画」、「第二章 社寺勢力の根底」、「第三章 社会組織」、「第四章 経済生活」、「第五章 精神生活」、「第六章 社寺の没落」という構成であり、その問題意識は「中世史の研究は、従来多く武家を中心とし、社寺に就いての考察は甚だ不十

分であった。ここに於て予は不敏を顧みず、心を専らにしてこの問題に当らし、社寺が中世の社会に於ていかなる位置を占め、いかなる機能を有したりしかを研究した」とされる。かつて筆者が指摘したように、こうした平泉の理解の背後にはクロウチエやマイネツケの歴史哲学はもちろんのこと<sup>(21)</sup>、本来ならば相容れないはずのカール・ランプレヒトの社会心理学の概念も大きく影響している<sup>(22)</sup>。この著書の特徴は、第三章のタイトルとした「社会組織」という言葉に適確に表わされている。彼がこの著書で追及したアジールとは、次のように規定される。

「実にアジールは人類発達の或る段階に於て、一般に経験する所の風習又は制度である。(中略)かくて本論文に於ては、専ら世界的知識を以て、我国のアジールを考察し、而してその考察の結果を以て、中世に於ける社寺の社会組織上の位置を論定したい。」(五八頁)

この時期の平泉は、「社会組織」や「社会問題」に関心を集めていた点で特徴的であった。しかし、平泉は同書のなかで「政治上の時代区画を以て、そのまま文化史上の時代区分に適用することの妥当性」を論証しており、その点で政治史Ⅱ文化史(社会史)という認識で一貫していた。また、同時にこうした大学院時代の研究は、当時の日本史学界へと十分に浸透していかなかった点にも注意を払う必要がある。当時の『史学雑誌』の記事を管見すると、平泉の著書についての書評やそれを受け継ぐ研究は皆無であったことが分かる。例外的に、経済史の細川亀市(一九〇五〜一九六二)、仏教史の田中久夫(一九一三〜一九九七)などが平泉の研究を高く評価しその継承に取り組んでいるが<sup>(23)</sup>、伝統的な国史学の系譜のなかで

は十分に受け入れられていなかったと考えるとよいだろう。平泉自身も、『中世に於ける社寺と社会との関係』を叙述した同じ時期には、「而してこの種の歴史観(Ⅱランプレヒトの社会心理学)に於ては、集団現象及び状態が過重視せられ、歴史的進程の原動力は一に社会状況に在つて、決して個人の手にあるものではないとせられた」と、「社会」を中心とした歴史叙述の方法論に対して否定的な見解を述べている<sup>(24)</sup>。

平泉は学位論文のほかは、「社会」について論じることを意図的に拒否している。平泉は、東大国史研究室の中心的な教員となると、社会経済史学関連(Ⅱ社会史関連)の雑誌は有害であるとして門下生たちに見せないように指示したという。この時期、東大の国史研究室では「社会史」という立場が表向き取られていなかったことは確実であろう。

しかし日本社会史研究の系譜は、平泉に拒否された後も、政治史とは別の方向として注目を集め続けていた。『日本社会史』の概説書が、一九三〇〜四〇年代にも頻繁に出されていることがその証左といえよう(ただし、こうした動きがむしろ経済学者や法学者によって進められている点に留意する必要がある)。その牽引者の一人となつたのが、本庄栄治郎である。以下、その基本的な概念についてみていきたい。

#### ○本庄栄治郎の日本社会史

「日本社会史」という概念を歴史学界に広く浸透させる大きな役割を果たしたのは、経済学者の本庄栄治郎(一八八八〜一九七三)であった。本庄の著書『日本社会史』(一九二四年)<sup>(25)</sup>は、当時日本

史を志していた多くの研究者に大きな影響を与えた。彼は「社会史」を次の四つに類型化している。

- (一) 人類社会の内に起こった重大事件を研究するもの
- (二) 社会そのものの発達を述べるもの
- (三) 仲間または公共の観念にかかわるもの
- (四) 社会問題の歴史

そして、「私は社会史と称して適当なりと考えるものは(二)と(四)との二つであると思う。たゞ(二)の社会史はむしろ社会学者の手に委ねることが適當であると思ふから、本書においては(四)の社会史すなわち社会問題の歴史としての社会史を取り扱いたい」として、④の社会問題を主な対象とする「日本社会史」を提唱した。本庄は「社会史研究の重要性」を次のように説明している。

「従来の歴史研究においては、その説くところきわめて一方に偏し、歴史といえ、何人も政治の歴史、外交の歴史もしくは戦争の歴史であると考へ、あるいは偉人説の如く、偉人豪傑を中心としてこれを説き、偉人に関することは、一般社会の発展に重大な関係のない些細の点に至るまで、これを詳説し攻究するふうがあつた。カーライルの如きも、歴史は英傑の伝記である (History is biography of great man) といつてゐる。しかしこれは必ずしも正当な方法ではない。(中略)我々は社会史の研究によつて、従来の社会がいかにして組織され、いかなる階級が存在し、その経済的關係がどうなつてゐたかを知り得るばかりでなく、この研究によつて、従来の国史の欠陥として考へられ、史家の通弊として批難されたところのものを、補い且つ改めることができるわけであつて、社会史研究のいかに重要

なものであるかは、論ずるまでもないところであらう。」(八頁)

また彼は、「日本の社会史は、日本人にとつて以上の興味があり、且つ便宜があるばかりではなく、我々自らの立場から考へても、外国の事の調査よりも、まず自国のことの研究に、主力を注ぐべき責務があると思う。」と述べ、西洋の歴史学の成果をそのまま日本に当てはめるような研究動向に対して批判を展開している。これは従来の日本の歴史家たちが、西洋社会との対比に関心を強くもち、自国民の社会生活について十分に対象としてこなかった点への反省であつた。著書『日本社会史』は、「氏族制度の社会」・「班田制度の社会」・「荘園制度の社会」・「分権的封建制度の社会」・「集権的封建制度の社会」・「資本主義制度の社会」と時代区分をしたうえで、各時代の「社会組織」・「社会階級」・「社会問題」について論じたものであるが<sup>(26)</sup>、本庄は「社会階級間の闘争」の在り様の変遷のなかに「日本社会史」の発達をみていた。すなわち「社会問題の意義」を、①社会を構成する各階級間、または階級内における不調和より生ずる諸般の問題、②階級間または階級内における経済上の不調和の問題(富の分配の不公平)、③分配論上同一種類の所得の分配にあずかる経済階級の利害衝突の問題の三つに分類したうえで、とくに第二・第三義を対象に論じている点でそれは顕著である。こうした考へ方は一貫しており、昭和一一(一九三六)年の『概観日本史論』でも、「社会階級若くは経済階級間に於ける、富の分配の不公平に起因する諸問題」を中心に沿えて叙述をおこなつてゐる<sup>(27)</sup>。

本庄のこうした社会史研究は、大きな反響を与えた。とくに喜田貞吉や瀧川政次郎は、本庄社会史に対して厳しい批判を展開し、論



争が展開された。その様相はまさに社会史ブームといえる状況であつたと考えられる。以下、その様子について詳しくみていきたい。

## (2) 「日本社会史」研究の展開

### ○本庄一喜田論争と一九三〇年代の「日本社会史」

先に少し触れたように、本庄の『日本社会史』が他の研究者に与えた影響はきわめて大きかつた。たとえば、日本史学者の中村直勝(一八九〇〜一九七六)は、本庄の『日本社会史』を「何と云つても大正史学の一大収穫」と絶賛している<sup>(28)</sup>。また本庄自身は、先述した喜田の社会史に対して、「日本社会史に就いて」と題する論文にて、民俗学的な記事を多用する喜田らの社会史研究を、社会史という言葉の「濫用」だとの批判を展開した。それに対し、喜田貞吉は本庄社会史に対して次のような再批判を展開している。

「もちろん経済問題を度外視してわが社会史を論ぜることが不可能ではあるが、人間社会に起こるところの諸現象は、必ずしも常に経済問題にのみ起因すると限られているものではない。伝統や感情はしばしば経済上の利害に反して行動せしめる。人間社会の諸問題をことごとく経済方面から観察せんとするのは、いわゆる唯物史観の弊であつて、ある意味においては人間を冒瀆するものといつてもよい。したがつていわゆる社会史をもつて経済問題の歴史とのみ狭く限定することは、とうてい妥当なる見解とはいわれない。本庄君のいわゆる『社会階級上の経済問題の歴史』というがごときものは、自分の見地から見ればいわゆる社会史の一部分をなすものであつて、むしろこれを日本経済史、もしくは日本経済史の社会組織に関する部分というを

妥当とする。」<sup>(29)</sup>

ここで喜田が「伝統や感情はしばしば経済上の利害に反して行動せしめる」と指摘している点が重要である。喜田の社会史とは、あくまで心性や伝統といった人間の思想的な側面、すなわち人間そのものの「つながり」(関係性)を基軸にしたものであつた。これに対して本庄も反論を展開しているが<sup>(30)</sup>、喜田と本庄の論争では「社会」をとらえるうえで、経済問題を中心に論じるか、人間(個人)を土台に論じていくか、という根本的な対立があつたことがうかがえよう<sup>(31)</sup>。このように本庄の社会史研究は多くの研究者に影響を与えたことは事実であるが、必ずしも無批判に受容されていゝたわけではなかつた。なかでも本庄の『日本社会史』を本格的に批判・継承したのが瀧川政次郎である。具体的にみてみよう。

### ○瀧川政次郎の「日本社会史」

本庄と同じく「社会経済史学」の発起人の一人であつた瀧川政次郎(一八九七〜一九九二)は、彼と同じく『日本社会史』(一九二九)<sup>(32)</sup>と題する著作を発表した。瀧川は、先述した本庄や喜田の社会史理論に対して批判しつつ、次のように述べている。

「卑見に従えば、社会史は各時代における社会組織と社会意識の発達変遷を説明したものでなければならぬ。ここに社会組織というのは、社会を構成する階級、団体、個人の並列的若しくは従属的なる相互関係であり、社会意識というのは、社会を統制する力ある社会成員の意識である。そうして過去においては勿論、将来においても、階級なき社会を想像することは困難であるから、社会組織の研究は、即ち社会階級の研究とならざ

るをえない。されば社会階級の発達変遷の跡を尋ねることは、実に社会史研究の重要な部分をなすものである。各時代における階級間の関係及び社会意識の変遷は、その時代における社会問題に反影せられているから、社会史の研究には、各時代の社会問題に注視することがきわめて肝要である。しかしこの意味の社会問題は、勿論階級間の経済問題には限らないのであって、社会全体に影響を及ぼすべき道德問題、法律問題も、また社会問題たることを失わないのである。」(一五〇—一六一頁)

すなわち、瀧川社会史とは、「社会階級の発達変遷」の歴史であった。実際、瀧川の『日本社会史』の章立ては、「公家階級」「武家階級」「士民階級」「賤民階級」などの社会階級にもとづき展開されており、本庄や喜田の理解とは大きく異なっている。また、日本法制史を専門とした瀧川が「日本社会史」の重点に「社会問題」の考察をおいている点は重要である。瀧川は戦後『日本行刑史』(青蛙房、一九六一年)、『遊女の歴史』(日本歴史新書、一九六五年)などの著作を次々と発表していくが、ここには法「制度」のみに捉われないう法「社会」史という視点が一貫して見られる(こうした視点は、法制史学者の石井良助(一九〇七—一九九三)にもみられる)。こうした「社会問題」に焦点をあてた瀧川の法制史研究は、後にみるように敗戦後の歴史学界において大きな影響を及ぼすことになった。

### ○社会史研究の定着

「社会史」研究が流行したのは、大正期であるという言説も多く聞かれるが、実際は一九三〇年代のほうがこうした動きは活発である。本庄の『日本社会史』と後述する瀧川政次郎の『日本社会史』

とを契機にして、この時期多くの研究者たちが「社会史」を主張するようになった。経済学者の土屋喬雄(一八九六—一九八八)は、「私は社会史を以て、厳密には基礎過程より上層諸過程に至るまでが内的連絡において全体的に把握せられた社会の発展の歴史的認識」であると解釈している<sup>(33)</sup>。また、経済学者の石浜知行(一八九五—一九五〇)も、著書『社会変革過程の諸問題』(一九三〇年)の「日本社会史の諸研究」と題する章のなかで、「社会組織」としての氏族制度や、衣食住などの「社会生活」、工業の発達などの「経済生活」の問題について論じている。また石浜は、「明治の過渡期に行はれた社会事象の大なるもの一つとしての明治六年筑前竹槍事件」についても注目している。石浜の関心は、古今東西の広範囲にわたっているが、資本主義社会の発達史を考えるうえで本庄社会史が大きな影響を与えていたことは間違いないだろう。

この時期は、本庄や土屋、石浜などを中心に日本近世の封建社会について関心が多くむけられ、身分と階級についての検討が活発におこなわれた。その際、農村社会について焦点が当てられ、多くの刺激的な成果が発表されていく。とくに先述の石浜のように社会問題として百姓一揆に着目する研究が数多く生み出された。代表的な成果としては、木村靖次『日本農民騒闘史』(白揚社、一九三〇年)、小野武夫『徳川時代百姓一揆叢談』(一九二七年)、『維新農民蜂起譚』(一九三〇年)、田村栄太郎『日本農民一揆録』(一九三〇年)、土屋喬雄『近世日本農村経済史論』(一九三三年)、土屋喬雄・小野道雄『明治初年農民騒擾録』(一九三二年)、黒正巖『百姓一揆の研究』(一九二八年)などがあげられよう。農村の生活組織への注目から農村社会の全体をとらえようとする視点としては、柳田國男の一連



の研究や、有賀喜左衛門『農村社会の研究』（一九三八年）などもこの文脈から理解できるであろう。

一方当時東京商科大学（現、一橋大学）の教授であった幸田成友（一八七三〜一九五四）もこの時期、日欧の通行史に着目し、『和蘭夜話』（同文館、一九三一年）、『史話東と西』（中央公論社、一九四〇年）、『日欧通行史』（岩波書店、一九四二年）など次々とその成果を発表していた。西垣晴次によれば、個人伝について多くの業績をのこした幸田の歴史観の根底にも、「歴史は国家、社会の枠組みのなかで、まず、その分析がなされるべきで、そうした分析以前に個人の役割を考えるのは慎むべきだとする」立場があらわれているというが<sup>(34)</sup>、幸田もまたこの時期、今日の社会史の礎となるような歴史学を進めていたことが明らかとなる。

また、昭和一〇（一九三五）年に刊行された歴史教育研究会編『歴史教育講座』（第一巻）には、「社会史経済史関係教材」が多数挙げられている。同年にはウィットフォードの『市民社会史』の翻訳本（新島繁訳）が刊行されるなど、「社会史」という認識はこの時期に一般的に普及したと考えてよいだろう。

要するに「社会史」研究の一般への普及は、一九三〇年代にみることができるが、このときすでに「社会史」に二つの方向性があったことに注意しなければならない。ちなみに、中村吉治は一九四一年の段階で「日本社会史の名を冠した著書が近來ほとんど出ないこと、社会史の概念の論争などが一向にみられない」と指摘しているが、必ずしもそうはいえない。たとえば、住谷亮一の『近世社会史』（三笠書房、一九三六年）、ソ連史を専門としつつもこの時期日本の古代史に関心を示した早川二郎（一九〇六〜一九三七）

の『古代社会史』（三笠書房、一九三六年）吉野作造の門下である経済学者の住谷悦治の『近世社会史』（三笠書房、一九四一年）、社会学者の加田哲二（一八九五〜一九六四）の『社会史』（一九四〇年）などの業績があり、またとくに歴史教育の教材として社会史の成果は多く取り入れられている。この意味で、日本社会史研究が、マクロな視点からみれば、二〇世紀前半を一貫して行われ続けてきたことが確認できるのではないか。

以上、主にここまで一九三〇年代を中心とした歴史家たちによる「社会史」の叙述について触れてきたが、ここまでの議論を整理しておきたい。日本における「社会史」の研究は、社会学者によっていち早く先鞭がつけられ、その後には日本史家へと影響を与えていった。しかし、東京帝国大学を中心とする国史研究者の間では政治史中心主義が根強くあり、「日本社会史」はむしろ経済学者や法学者を中心にして展開されることになった。<sup>35</sup> 第一次日本社会史ブーム<sup>36</sup>の最大の特徴は、まさにこうした社会学者・経済学者・法学者による日本史分析が中心であった点に意味があるろう。なおこの時期の「社会史」研究は、本庄や土屋が指摘しているように、大きく分けて四つの流れがあったと思われる。①社会問題の歴史（三浦周行・大宅壮一など）、②階級の歴史（瀧川政次郎・土屋喬雄など）、③階級闘争の歴史（小野武夫など）、④社会組織の歴史（柳田國男・有賀喜左衛門など）である。柳田國男を中心とする「日本民俗学」、有賀喜左衛門・古島敏雄による日本農民史研究としての流れも、やや論理の飛躍はあるが④の範疇におさまる。彼らの研究は、農村の生活組織のなかにみられる様々な問題から、農村社会の在り様を見

出そうとする研究スタイルであり、その点では「日本社会史」ときわめて親和的であった。また社会構成体史研究の立場から社会史批判を展開した安良城盛昭が「日本史学史における社会史の源流・起点についていえば、第一に、琉球・沖縄史研究の開拓者・伊波普猷をまずあげるべきであり、第二に、雑誌「民族と歴史」(一九一九〜一九二四年)・「社会史研究」(一九二四年)を主宰した喜田貞吉を看過することはできない」としたように<sup>(35)</sup>、伊波の研究も社会史の先駆として位置づけることが可能である。しかしこうした点は、紙幅の関係上割愛させていただき、次に敗戦後の「日本社会史」の展開についてみていくことにしたい。

## 2 戦後の日本社会史研究とマルクス主義歴史学

### (1) 占領下の日本社会史研究

敗戦後の一九四七〜五〇年頃までの間、第二次社会史ブームといえるような状況が起こる。その様子についてみていきたい。

社会学者の村山節は、文明法則史学<sup>(36)</sup>の提唱者として有名であるが、『日本民族社会史』第一巻<sup>(37)</sup>のなかで、「日本社会史の根本の難問」として、①天皇制及び天皇族の起源及び古代の実状の問題、②日本民族の源流の問題、③日本文化の起源及び性質の問題、④日本の国家の起源及び古代の真相の問題、⑤日本の階級制度の起源の問題等を挙げ、それらについての「科学的」で正確な分析が必要であると述べている。村山の意図したものは、自身も述べる通り、「民族の基礎の上に立つ社会秩序史に関する研究」であった。

また、この時期の代表的な人物として、日本古代社会経済史の川上多助(一八八四〜一九五九)、日本近世史では北島正元(一九一二〜一九八三)、中村孝也(一八八五〜一九七〇)などが挙げられる。川上の『日本古代社会史の研究』(一九四七年)は当時高く評価されている。川上は戦時期に『日本歴史概説』上・下を叙していることから明らかのように、日本史の全時代をカバーする視野を持ち合わせており、「日本社会史」からの影響も多分に受けていたことがうかがえる。

また社会政策で有名な経済学者大河内一男(一九〇五〜一九八四)も、名著『社会思想史』を書くにあたり、「まえがき」で「社会思想史と言ふよりは、社会史的思想史とでも名付けた方が筆者の気持ちに適った題名である。主として、資本主義経済の母国イギリスを中心としながら、近代の資本主義経済の発展と、それが生み出すさまざまな社会思想の交錯を示さうとしたものであり、従つて、社会思想史を社会主義思想史と同視するやうな態度をさけて、経済社会の発展に伴つて生ずる支配者の要求や思想と被支配者の抵抗や希望との対立と闘争とを跡づけようと試みた。」と述べている。女性史家として著名な高群逸枝(一八九四〜一九六四)が『日本女性社会史』(一九四七年)を発表したのもこの時期であった。

日本社会史の概説書としては、玉城肇(一九〇二〜一九八〇)の『やさしい日本社会史』(一九四八年)、経済学者の江頭恒治(一九〇〇〜一九七八)の論文「日本社会史素描」(一九四八年)などの著作が次々に発表された。もちろん、すでに先述したように、「日本社会史」が歴史教育のなかで重要視される傾向は、十五年戦争期に一貫して見られたものであるが、この時期に「日本社会史」の新たな

ブームが展開していたと捉えることが妥当であろう。たとえば日本中世の芸能史を専攻された尾形龜吉は著書『日本社会文化史』（明治書院、一九五〇年）の「序文」で次のように述べている。

「われわれに課せられた最大の問題は、共同生活の完成ということである。（中略）そのような考慮の一つの手がかりとして、日本社会の具体的な状態がどのようなものであるかを知ることが求められる。それに答えるのは、日本社会の歴史であるだろう。歴史はたえず否定される。しかし、それにもかゝらず、たえず現実の底にあつて影響力を及ぼして来る。人間が歴史的存在であると言われる所以である。その故に、人はいつも歴史を顧みるべく要請される。ことに日本はその一貫した長い歴史の故に、その力も今なお軽視し得ないものがある。善きにつけ、悪しきにつけ、歴史を知ることなくしては、日本の将来のための新しい設計図を正しく引くことは出来ないであろう。われらの共同生活の完成という、このさしせまつた大きな課題の解決のためにも、その歴史的性格についての知識が必要である。（中略）ちなみに、これを社会文化史とよぶ所以は、社会そのものも人間のいとなみとして一箇の文化であるからに外ならない。それは人間の共同生活の大きな枠たると共に、それ自身一つの文化として、時代に応ずる自己表現をするのである。」

なぜ、この時期に『社会史ブーム』が現出されたのであるかは、ここからもうかがえる。その理由を『戦時期に抑圧されていた「社会」への注目が反動的に表出したのではないか？』などと理解することは適切ではない。すでに指摘したように、戦時期も「日本社会史」は提唱し続けられていたことは明らかである。では、なぜか。

その一つの理由として、この時期が占領期であったことが大きな要因としてあげられる。まさに日本人の「共同生活の完成」換言すれば、日本人の「つながり」の歴史が、敗戦と占領という大きな衝撃のなかで、差し迫ったものと感じられたのである。よって、この時期を契機に「日本社会史」も、「日本社会の歴史」解明というかたちで再構成されることになった。敗戦という衝撃のなかで、日本社会の歴史的な展開を考える社会的な要請が大きく作用していたように思われる。そこでは、社会構成体史的な視点にもとづく社会史研究（マクロ的社会史と呼ぶ）と、喜田貞吉が注目していたような社会の非対象な部分に着目する社会史研究（ミクロ的社会史と呼ぶ）というすでに用意されていた二つの方向性から展開していくことになった（尾形の視点は、人間の生活に土台を置く点で後者に位置付けられる）。

敗戦直後に前者の研究方向の指針となった著作が、歴史学研究会編『日本社会の史的究明』（一九四九年）である。これは昭和二十一年（一九四六）一〇月七日～二八日までの毎週月・水・金の午後三時三〇分から東京大学法文経三五番教室において開かれた歴史学研究会主催の講習会「日本社会の特質の史的究明」をもとに編集されたものであり、科学的・進歩的な歴史学の樹立と理論的な見通しの形成が目的とされている。ねずまさし（一九〇八～一九八六）・石母田正（一九二二～一九八六）・林基（一九一四～二〇一〇）・松島栄一（一九一七～二〇〇二）・羽仁五郎（一九〇一～一九八三）・丸山真男（一九一四～一九九六）・古島敏雄（一九一二～一九九五）・大塚久雄（一九〇七～一九九六）・永原慶二（一九二二



（二〇〇四）というピックネームが一同に会した論文集であり、この講習会（著書）が戦後歴史学の一つの起点となったことは間違いないであろう。この著書の「附録」には、永原慶二と「まつしまえいち」による「参考書」が掲載されている。ここでは「日本社会の歴史を概観するための著書」として、土屋喬雄『日本経済史概要』・瀧川政次郎『日本社会史』・中村吉治『日本経済史概説』・『日本社会史概説』・宮本又次『日本経済史講話』をあげ、これらを次のように批判している。

「大体これらの書物が主要なものと考えられるのであるが、きわめて大づかみにいって、これらの書物は共通の特徴をもっている。一口にいって、これらの書物は、いずれも、日本社会の歴史の各時期を構造的にはとらえていない。したがって、説明が平板な事実の整理報告に終始しているのである。」

永原と松島は、これらの社会史研究が、いずれも「社会経済史学の見解に立つもの」であることに注目する。そして「社会経済史学は明瞭に従来の政治史・制度史への不信から発しているがゆえに、ここにおいては逆に政治への無関心が示されていたのである」とした上で、次のように指摘している。

「だが、人間の本質が、個々の個人に内在する抽象物ではなく、現実には、それは社会的諸関係の総体である如く、個々の経済的・社会的事象も、之を歴史学の対象として取り上げる限り、悉く、社会的諸関係の表現としてこれを把握せねばならない。したがって、経済的・社会的事象は個々にそれのみとして扱われるべきではなく、あくまで、それを産出する人間の社会的諸関係においてとらえねばならぬわけであり、この限りで、優越

せる意味における政治史的視角の下にとり扱われねばならないのである。こうした意味で、社会経済史学は、旧来の政治史に對し大きな進歩的意義をもち、その個々の研究は精緻の度をたかめたにもかゝらず、大きな限界をもっているのである。」

永原らが注目していたのは、個別の事象ではなく、歴史の「本質」であった。それは逆をいえば、敗戦当初彼らが目指していたものは、社会経済史研究と政治史をリンクさせる方法論であり、その点からすれば、戦後歴史学はまさしく戦前の日本社会史研究の批判からスタートされたのである。

こうした研究の一方で、わりと早い時期から、人間そのものへの関心を強くもち、人と人との関係性を重視した学者も存在した。すなわち、歴史学研究会の構成員が、社会を實在的なものと捉えたのに対して、彼らは社会名目論的な立場から歴史叙述を試みた。こうした側面から研究を推し進めた代表的な論者として、中村吉治と和歌森太郎である。以下で、その特徴について考察していきたい。

## （2）中村吉治と和歌森太郎の日本社会史研究

### ○中村吉治の「日本社会史」概説

敗戦後の日本のアカデミズムでは、日本社会の前近代的な側面、すなわち封建遺制について関心が集中し、活発な議論が展開された。政治学者の丸山真男（一九一四～一九九六）や法学者の川島武宣（一九〇九～一九九二）の研究はまさにそうした側面が強く出されている。このなかで中村吉治（一九〇五～一九八六）も、戦前から彼の関心をさらに前進させ、「日本社会史」の考え方をさらに体系化させていった。中村は「日本社会史」と題する著書を数

多く刊行しているが、とくに『体系日本史叢書』八巻（山川出版社、一九八二年）の総論部分には中村の企図したものが明確にあらわれている。

「整理していうと、社会史を、家と村と社会（国家）の、それぞれの構造とその組合せの歴史と考えようと思う。人が個人で生きられないことは自明だが、その生きるべきつながりの仕方、その時の経済状態や政治の動き、または宗教や呪術などは、その時代の人の考え方によっている。それらはすべて変化するのである。経済は発達し、政治も変り、物の考え方も変る。したがって、家といつても、中味が、中味の人数や秩序などが、変化するのである。家に歴史があるわけである。同様にその家の連合組織（村）も変るし、それを大きくとりこんだ組織も変るのである。」（三頁）

中村社会史の特徴は、家・共同体を基本に沿え、その拡大した形としての「族」「国家」を見ていこうとする点にあった。中村の『日本社会史』（一九四七年）は、「社会構造の単位の変化とくに基礎単位の変化により、最終的に現代的個人が生まれるまでの歴史」と「身分社会から階級社会への変化、つまり現代的階級社会が成立するまでの身分社会の変遷の歴史」という二つに主題が置かれ、民衆からみた歴史を構想するものであり、その考え方は戦後一貫していた。これは、中村自身が「戦後の私は一貫してこの本（『日本社会史（新版）』）の中心となる共同体の問題やその周辺を探っていたような気がする」と述べていることから明らかである<sup>(38)</sup>。中村は共同体に着目することによって「個人と社会の関係の歴史、支配者と被支配者の関係の歴史、身分と階級の歴史、社会的諸階層の性

質とその相関関係の歴史」などが明らかとなると理解したのである。中村はこうした「社会史」の考え方を戦前から抱いており、一九三〇年代には「日本社会史」研究の研究史整理もおこなっている<sup>(39)</sup>。その意味で、戦後当初に「日本社会史」の概念を牽引したのは、紛れもなく中村であったということができる。

#### ○和歌森太郎の「日本社会史の研究」

戦後の「日本社会史」研究を牽引したもう一人の人物として民俗学者の和歌森太郎（一九一五～一九七七）があげられる。和歌森の社会史概念については、著書『日本社会の形成』（一九五四年）<sup>(40)</sup>に詳しい。この著書は、「これから述べるのは、今の日本の社会がどのようにしてつくり上げられてきたかということ、いわば日本の社会史になるわけでありませう」という書き出しで始められるが、和歌森は、研究の対象とすべき「社会」を「あるいは協同関係、あるいは対立関係をなすような人間の交渉」として把握し、歴史学の根幹である時代区分論を意識したうえで、日本の社会史（社会発展）を「個人が社会から開放される度合の高まりの推移」と理解した。また彼は、「人間関係のあらたまりの要求」を重視し、日本の社会史は、「本然的、無意識的な共同」から「人為的、有意的な結合」へと発展していくとする。

和歌森の考え方は、「日本社会の特殊な性格が、時の政権掌握者と皇室との結びつき方に反映して現れて来たし、またその存在が逆に日本人の社会発展の仕方等特色づけている」と見る「点で、一九五〇年代のほかの歴史学研究との考え方の差異は明確であるが、日本史を「社会」という側面をメルクマールに独自の視点で論じた

点はきわめて重要であつた。のちに平山和彦と和歌森民男は、和歌森太郎の社会史論にも、一九八〇年代に流行した社会史と同様に所有論と分業論、「法」の問題が欠落している点を批判しているが、和歌森の歴史観が「個人」と「社会」の関係性（人間関係の近代化＝民主化）をつねに念頭にしていたことを見逃すことはできない。和歌森は「歴史と個人」<sup>(4)</sup>という論文のなかで次のように論じている。

「極端にいえば、人物固有名詞を全くいれない日本歴史を叙述するのが理想だという確信はまだ消えないでいる。少なくともよくいわれる英雄偉人の類、知名の人物の名は省いても歴史は書けるし、そういう歴史でも、いやその方が、人生のためになると思っている。(中略)ただ働くことに追われて、文字の世界にも余り縁をもたない無名の民衆の、不断の努力、生活意欲なくして今日の時勢はもたらされなかつた、とするのである。

(中略)歴史に人間を回復せよ、という論がある。これは私も同感だ。要は人間の生活境遇をつかむことであつて、そのことと、歴史における個人の役割を重視することと混同してはならない。」(一九一〜一九二頁)

和歌森の考え方は、「社会」とは人間と人間のつながりによってもたらされるものであり、英雄偉人も「社会」によってつくられるものだという認識が強くあつた(これは師匠である柳田国男の影響も多い)。すなわち、歴史における「個人」(＝英雄偉人ではない)の「生活境遇」をつかむことこそが、日本社会史の総体を把握することに直結するのであり、この点は、先述した三浦周行などの共通点が見いだせる。

戦後歴史学は、先にみた「日本社会の史的究明」に典型されるように、戦前には傍流であつたはずの「日本社会史」との共通点が非常に多くみられる。しかしこうした「日本社会史」の概念の浸透は、「日本社会史」の概念の分立をまねくことになる。すなわち、社会構成体論にもとづく社会史研究と、人と人の関係性を重視する社会史研究とに大きな分裂が生じ、無視できないものとなつていた。前者を歴史(社会)構造論、後者を歴史(社会)関係論と規定できるが、こうした概念の対立が表面化したのが、他ならぬ『昭和史』論争であつたということができよう。

#### おわりに

本稿で明らかにしたように、日本社会史研究は二〇世紀前半に一貫してみられた歴史学における分野であるが、そこには少なくとも二度のブームがあつたと思われる。一つめのそれは、一九二〇〜三〇年までの本庄・喜田・瀧川らを中心としたものである。この時期には論争も活発におこなわれており、また正統な国史研究者よりもむしろ経済学者・法学者によって日本社会史が展開された点に特徴がみられる(社会史の創立も、社会学者によってなされた点に注意する必要がある)。二つめのブームは、一九四〇〜一九五一年の占領期を中心に展開された。この時期の特徴は「日本社会史」研究という枠組みからではなく、「日本社会の歴史」への関心の高まりの結果として、社会史研究が急激に活発となつたという側面が強くみられる。一九五〇〜六〇年代の中村吉治や和歌森太郎は、積極的に「日本社会史」という枠組みを提唱し研究を進めたが、ブームを形成するには至らなかつた。その理由は、戦前とは事情が異なり、



多くの日本史研究者が「日本社会の発展」史に着目したことによると思われる。この意味では戦後歴史学は、(戦前でいうところの)社会史そのものであったと考えられる。戦後歴史学が「社会史」であるということは、すなわち「社会とは何か」という問題を内在させることになった。ここに社会を構造として捉える社会構成史研究と、社会を関係性の総体と考える社会関係論的な視点の対立が内包されることになった。

それでは一九六〇年代以降「日本社会史」はどのような展開をみせていくのか、その点については稿をあらためて詳述したい。

#### ◆参考文献〔日本社会史研究〕

一九〇〇～一九一〇年代

○平山周『中国秘密社会史』(一九〇〇年)

○守屋源次郎『独逸社会史』(実業之日本社、一九〇三年)

○遠藤隆吉『社会史論』(同文館、一九〇五年)

○綿貫哲雄『社会史論』(『東亜の光』一一巻七・八号、一九一六年)

○阿部秀助『資本主義の社会史的研究』(慶応義塾理財学会、一九一四年)

一九二〇～一九三〇年代

○三浦周行『国史上の社会問題』(一九二〇年)

○佐野学『日本社会史序論』(同人社、一九二三年)

○本庄栄治郎『日本社会史』(改造社、一九二四年)

○平泉澄『中世に於ける社寺と社会との関係』(至文堂、一九二六年)

○尾池義雄『日本近世社会史の研究』(中西書房、一九二八年)

○本庄栄治郎『日本社会経済史』(改造社、一九二八年)

○呉文炳『江戸社会史』(啓明社、一九二九年)

○瀧川政次郎『日本社会史』(刀江書院、一九二九年)

○石浜知行『社会変革過程の諸問題』(天人社、一九三〇年)

○桜井庄太郎『日本封建社会史』(白鳳社、一九三一年)

○小野武夫『維新農村社会史論』(刀江書院、一九三二年)

○関栄吉『近世初期思想の社会史的考察』(『社会経済史学』、一九三二年)

三二年)

○細川亀市『農奴社会史考』(白東社、一九三二年)

○細川亀市『日本封建社会史』(白東社、一九三三年)

○渡部義通『日本原始社会史』(白揚社、一九三三年)

○伊東多三郎『廃仏毀釈の社会史的考察』(『社会経済史学』、一九三三年)

三三年)

○伊豆公夫『日本社会史講話』(白揚社、一九三四年)

○中村吉治『社会史』(四海書房、一九三五年)

○早川二郎『古代社会史』(三笠書房、一九三六年)

一九四〇年代

○加田哲二『社会史』(東洋経済新報社、一九四〇年)

○住谷悦治『近世社会史』(三笠書房、一九四一年)

○清水幾太郎・平田内蔵吉『科学社会史』(山雅房、一九四一年)

○中村孝也編『生活と社会』(小学館、一九四二年)

○金子鷹之助『大東亜共栄圏の民族と思想』(岩波書店、一九四二年)

年)

○加田哲二『社会史』(『現代日本文明史』第一一巻、東洋経済新報社、一九四四年)

○川上多助『日本古代社会史の研究』（河出書房新社、一九四七年）

○北島正元『近世日本農村社会史』（雄山閣、一九四七年）

○中村吉治『日本社会史概説』（碓氷書房、一九四七年）

○早川二郎『古代社会史』（岩崎書店、一九四七年）

○国際社会科学協会編『社会史』（二見書房、一九四七年）

○高群逸枝『日本女性社会史』（新日本社、一九四八年）

○玉城肇『やさしい日本社会史』（労働文化社、一九四八年）

○江頭恒治『日本社会史素描』（彦根経専論叢）一号、一九四八年

○村山節『日本民族社会史』第一卷（高山書院、一九四九年）

○中村孝也『新国史観』巻九（農村近世農村社会史論）雄山閣、一九四九年）

一九四九年）

○桜井庄太郎『遊技の社会史』（『社会と学校』三巻、一九四九年）

○歴史学研究会編『日本社会の史的究明』（岩波書店、一九四九年）

一九五〇年代

○尾形亀吉『日本社会文化史』（明治書院、一九五〇年）

○竹内理三『ぼくらの社会史』（東京堂、一九五〇年）

○北島正元『近世日本農村社会史』（雄山閣、一九五一年）

○藤田五郎『近世農政史論』（お茶の水書房、一九五一年）

○本田喜代治『社会思想史 あるいは思想の社会史』（培風館、一九五一年）

五一年）

○奈良本辰也『近世封建社会史論』（要書房、一九五二年）

○羽鳥卓也『近世日本社会史研究』（未来社、一九五四年）

○中村孝也『近世農村社会史』（春日書院、一九五五年）

○遠藤進之助『近世農村社会史研究』（吉川弘文館、一九五六年）

○和歌森太郎『日本社会史』（学燈社、一九五七年）

註

(1) たとえば、網野善彦・阿部謹也『対談』中世の再発見（平凡社、一九八二年）、佐々木潤之介『社会史』と社会史について（『歴史学研究』五二〇号、一九八三年）など。また、「日本社会史」の研究史としては、中村吉治『社会史研究史』（刀水書房、一九八八年）、嶋田隆『日本社会史について』（『社会科学の方法』一四号、一九八一年）を参照のこと。

(2) 平山和男・和歌森民男「和歌森太郎氏の「社会史」論」（『和歌森太郎著作集』第一巻、弘文堂、一九八一年）。

(3) 安良城盛昭『天皇・天皇制・百姓・沖繩』（吉川弘文館、一九八九年）、六頁。

(4) たとえば、日本史学史を代表する遠山茂樹『戦後の歴史学と歴史意識』（岩波書店、一九六八年）、北山茂夫『日本近代史学の発展』（『岩波講座 日本歴史』別館I、岩波書店、一九六三年）、永原慶二『二〇世紀日本の歴史学』（吉川弘文館、二〇〇三年）などの著作のなかでも社会史の位置づけは不正確であると言わざるをえない。註(1)でみたように、例外的に「日本社会史研究史」が振り返られることもあったが、三〇年以上前の成果であって不十分な点多々見られる。

(5) 伊達は日本の歴史を概観して、「骨（かばね）の時代」（大化の改新以前）、「職（つかさ）の時代」（鎌倉開幕以前）、「名の代」（江戸末期まで）の三期に区分している。この際メルクマールとされるのが、人間のめざす価値（文化価値）の転移であると理解しており、政治的推移のみに拠らない歴史思想を展開した

- (石川一良編『日本思想史概論』吉川弘文館、一九六三年)。
- (6) ここでは、遠藤隆吉『近世社会学』(成見堂、一九〇七年)における「附録 社会史論」を参照した。
- (7) 綿貫哲雄『社会史論』(『東亜の光』一一卷七号、一九一六年)。
- (8) 中村前掲書(註1) 参照。
- (9) この点については『社会問題講座』(第一巻、第四卷、新潮社、一九二七年)などの刊行からも明らかである。
- (10) 三浦周行「楠木正成」(初出一九〇九年)『新編 歴史と人物』(岩波文庫、一九九〇年)、一七六頁。
- (11) 永原慶二『二〇世紀日本の歴史学』(吉川弘文館、二〇〇三年)、七七頁。
- (12) 三浦周行「成上り者」(初出一九二二年) 註10参照。
- (13) 今谷明は、「フランス、アナル学派の影響下にある戦後の「社会史」の源流は、喜田貞吉の歴史学にあるとも言うことができよう」と述べている(『喜田貞吉』今谷明・大濱徹也・尾形勇・樺山紘一編『二〇世紀の歴史家たち』(1) 日本編 上』刀水書房、一九九七年)。
- (14) 『喜田貞吉著作集』一〇巻、平凡社、一九八二年、一四五〜一四六頁。
- (15) 関口寛「初期水平運動と佐野学」(『部落解放研究』一八三号、二〇〇八年)。
- (16) 黒川伊織「佐野学における唯物史観の受容と部落問題の発見」(『部落解放研究』一九一号、二〇一一年)。
- (17) 増田抱村『児童社会史』(厚生閣、一九二四年)。
- (18) 川瀬善美「解説」(増田抱村『児童社会史』日本図書センター、一九八三年)。
- (19) 戦後、平泉がスケープゴートにされ、多くの皇国史観主張者の責任逃れとなったことを看過してはならない(阿部猛『太平洋戦争と歴史学』吉川弘文館、一九九九年)。
- (20) 平泉澄『中世に於ける社寺と社会との関係』(至文堂、一九二六年)。
- (21) この点に関しては、斉藤孝「異常な風景―平泉澄」(『昭和史学』ノート)小学館、一九八四年)、今谷明「皇国史観と革命論」(『横浜市立大学論叢 人文科学系列』一四三号、一九九二年)、植村和秀『丸山真男と平泉澄』(柏書房、二〇〇四年)などを参照のこと。
- (22) 拙稿「平泉澄と網野善彦」(阿部猛・田村貞雄編『明治期日本の光と影』同成社、二〇〇八年)。
- (23) 細川亀市『日本寺院経済史論』(啓明社、一九三〇年)、田中久夫「戦国時代に於ける科人及び下人の社寺への走入」(『歴史地理』七六卷二号、一九四〇年)など。
- (24) 平泉澄『我が歴史観』(至文堂、一九二六年)。
- (25) ここでは、『本庄栄治郎著作集 第五冊』(清文堂、一九七二年)を参照した。
- (26) 本庄栄治郎『日本経済社会史論』(改造社、一九二八年)も、同様の理解が示されている(『本庄栄治郎著作集 第三冊』清文堂、一九七二年)。
- (27) 本庄栄治郎『日本社会史概観』(雄山閣編輯局編『概論日本史論』雄山閣、一九三六年)、七七頁。
- (28) 中村直勝『日本社会史』を讀む(『歴史と地理』一三卷六号)。



(29) 喜田貞吉「日本社会史とは何ぞや」『喜田貞吉著作集一〇 部落問題と社会史』平凡社、一九八二年(初出 一九二四年)、一四九頁。

(30) 本庄栄治郎「日本社会史に就いて」『歴史と地理』一一卷五号、喜田「日本社会史とは何ぞや」『歴史と地理』一三卷二号、同「社会史と経済史」『歴史地理』四三卷二号、本庄「再び『日本社会史』の意義に就いて」『歴史と地理』一三卷五号。

(31) 当時「社会史」については相当活発に議論されていたようであらう。たとえば佐古慶二なども「日本社会史の著者に先づ聴聞申す一箇條」(『商業及び経済研究』三五号、一九二四年)という論文を発表している。まさに「ブーム」といってよいだろう。

(32) ここでは『日本社会史』(角川書店、一九五九年)を参照した。  
(33) 土屋喬雄「日本社会史概要」『社会科学講座』一三号、一九三二年。

(34) 西垣晴次「幸田成友」(『二〇世紀の歴史家たち(1)』刀水書房、一九九七年)。

(35) 安良城前掲書、六頁。

(36) 村山節『文明の研究』(光村推古書院、一九八四年)。

(37) 村山節『天皇族の起原(第一卷)』(高山書院、一九四九年)。

(38) 中村吉治『日本社会史(新版)』(山川出版社、一九七〇年)。

(39) こうした戦前の研究は、中村吉治『社会史研究史』(刀水書房、一九八八年)などにまとめられている。

(40) 和歌森太郎『日本社会の形成』(要書房、一九五四年)。のちに『和歌森太郎著作集』(第一二巻、弘文堂、一九八一年)所収、以下、頁数はこの著作集に基づく。

(41) 和歌森太郎「歴史と個人」『教育大学新聞』二七六号、一九五六年、のちに「歴史における個人の役割」として『和歌森太郎著作集』(前掲)に所収。